
ショートショート他

和泉あらた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ショートショート他

【Nコード】

N2190N

【作者名】

和泉あらた

【あらすじ】

テーマに沿った超ショートショートホラーとか、途中で諦めた小説の仮置き場。ジャンルや傾向は様々、オカルト・ホラー・スプラッタ風味。一つにつき、500字〜1200字程度。

いたづら？『壁アート』

今日は寝ないつもりだった。

小さな物音にも耳を澄まし、何かあれば即警察に連絡してやる、と。

昨日塗ったばかりの家の壁。

今まで幾度となく落書きされて、その度に塗り直して来た。

書いている本人はアートのつもりなのかも知れないが、家の持ち主からしたら立派な犯罪だ。

自分で塗り直すとムラが出るから隙を与えるのかも知れないと思い、今回は業者に依頼してみた。

この綺麗に塗られた壁に落書きをするようなら、本当に最低やろうである事は間違いない。

けれど次に気付いたのは、横で朝食の準備に起き上がる妻の気配だった。

小鳥のさえずりを聞きながら、妻を追い越し玄関に出る。

ああ、やはりやられていた。

まだ完全に乾いていなかった壁の一面には無数の手形がついていた。

ガツクリと肩を落とす。

それでもそのままにしておくわけには行かない。

昨日せっかく塗ってくれたのに、こんなのを見せるのは申し訳ないと、今日はまた違う業者に依頼をした。

無数の手形でいたづらされた壁を見せる。

すると業者は

本当に塗ってしまったていいんですか？

と聞いてきた。

おかしい事をいうものだ。

近所の目もあるし、手形を残したままにするわけにも行かないのはわかるだろう。

それともこの状態で一度警察に見せた方が良いのだろうかと少し悩む。

その様子を見て業者は再び口を開いた。

これはある意味アートですよ。だって全ての手形が違う人のものなんですから。

いたづら？『悪趣味な遊び』

この時期の新幹線はやたらと混んでいる。

喫煙席を取ればこの混雑から少しは逃れられたのだろう。

しかし禁煙を始めたばかりの身。

歩きタバコをしている人の煙が香っただけでも、吸いたい衝動がでてしまうのだから、喫煙車両などに乗ったら我慢など出来なくなってしまう。

通路側しか残っていなかった三人掛けの席には親子連れが座って居て、窓際には小学校に入る前ぐらいの小さな男の子。

間には疲れた様に眠る母親が座って居た。

男の子はいたづら盛りといった感じで、子供特有の意味不明の奇声を上げたり、アナウンスを繰り返して見たりと大忙しだ。

それでも楽しいのであろう事は伝わってくる。

横の通路をドタバタと走りながら同じように奇声をあげる子供に呆れながら、ヘッドフォンの音量を最大にし眠りについた。

ふと、もたれ掛かってくる感触で目を覚ます。

横で眠っている男の子の母親である事はすぐわかる。

肩の力で押し返すが、程なくしてまたもたれ掛かる感触。

しょうがないなと目をやると、いたづらっ子ぽく笑う男の子と目があつた。

両手は母親に添えていて、こちらに倒してきているのだとわかる。

もうすぐ終着駅だ。

しばらくの間だけだと、その悪趣味な遊びに付き合つてあげる事とする。

二人の間で右に左に揺れる母親。

肩で押し返すと、無邪気に笑いながら両手でまた倒してくる。

新幹線を降りる頃には、男の子は満足したらしくバイバイと可愛い笑顔で手を振って見送ってくれた。

これから母親なしで生きて行くことになるとは、まだ知らないままで。

いたづら？』はみ出た傘』

“ トウルルルルル…… ”

“ 扉が閉まります。ご注意ください ”

そのアナウンスを聞きながら、エスカレーターを駆け上がる。

“ プシュー ”

“ 駆け込み乗車はお止めください！ ”

そのアナウンスを聞きながら、閉まりかけた電車に乗り込む。

濡れかけの長い髪を整えながら、ドアにもたれかかる。

ここからは準急で終点までこちら側のドアは開かない。

もう少し、後五分とは言わない。

せめて一分でも家を早く出れば、こんな息を切らす必要はない。

けれど玄関前の全身鏡を見た途端、服を着替えなくなったのだ。

別に今日の夜デートが待っているわけではないけれど、コーディネートとを間違えた日は一日席から立つのさえ嫌になるのだ。

乱れた息のまま音楽でも聞こうとした時、左手に持った傘に違和感を感じた。

ああ、またやられた。

良くやるのだ。バックとか髪の毛の先とか。

それにしても今日は酷い。

傘の半分以上が扉から外に出てしまっている。

周りからなるべく見えないように、でも力強く引っ張るが抜けない。

めざとく見つけた私立小学生の笑い声を聞きながら、終点まで潔くこのまま諦めることにした。

次の駅で人が大量に乗り込んできて、私は仕方なしに傘の横に身を寄せた。

その時さつき笑っていた小学生が、むき出しの傘をさらに外に押し出したのだ。

もうこちら側には傘の柄のみしか残っていない。

走り出すと同時に電車の外に出た傘は開いて、台風の時みたいに逆になっている。

今にも骨組を覆ったビニールの部分が吹き飛びそうに、すごい音でバサバサと揺らめいている。

何てことをしてくれたのだ、と小学生を思わずみると、さすがに

いたづらが過ぎたのだと気付き口を開いて固まっている。

このままじゃ、やばい。次のホームを通り過ぎる前に何とかしなければ。

狭い車内でがむしゃらに引っ張ると、開いて細くなった傘はほんの少しだけ戻って来たけれど取れかけたビニールの部分が風を受け抵抗が凄い。

もうすぐホームだ、誰も近くにいないでと思った時に、私はドアに跳ね飛ばされた。

後ろにいたサラリーマンが代わりに傘に手を伸ばしてくれたのだ。

しかしもう遅かった。

私は押し付けられた窓越しに電車が混んだホームに滑り込むのが見えた。

耳につんざく様な悲鳴と、窓越しの血飛沫とともに。

いたづら？』机の引き出し』

家に居たら何をするかわからないからと、ママは必ずご飯の買い物に僕を連れて行く。

前にお留守番の時に、ペットのウサギにほうれん草を上げたのを、怒っている様だった。

けれどお菓子売り場の前で座って居ても、何かを買ってくれるわけではない。

僕はすぐに飽きて広いスーパーの中を一人で探検していた。

その時、“見切品”と書かれた赤いシールがたくさん貼られた紙を見つけた。

“みきりひん”と言うのは、古くなったり売れ残ったりしたものを自由に持ってかえっていいらしい。

ママはいつもこのシールが貼られたものを手にとるけれど、絶対カゴには入れなかった。

僕はこのシールをこっそり貼ってしまうことにした。

たくさん入ったお寿司のセット、じゃなくてかんぴょう巻。

分厚いステーキ、じゃなくて豚の挽肉。

マグロの刺身じゃなくて、魚のアラ。

ばれない様に、慎重に、ちょうど良いものを選んで。

そして、お菓子売り場にいた人気者のミキちゃん、じゃなくて入り口でボッーとしていた暗いユウコに。

次の日から、ユウコは幼稚園に来なくなった。

僕の願い通りになったのだ。

まだシールは僕の机の引き出しにたくさん閉まってある。

いたづら? 『せんぶり茶』 (前書き)

恐いというか汚いです。迷ったけどのせてみました。

いたづら？『せんぶり茶』

苦手というか、嫌っている取引先のやつがいた。

もう数年前から、うちの会社に出入りしている印刷屋の若い男なのだが、ねっちこいというか何というか気持ちが悪いのだ。

女性が言うような、生理的に受け付けないという感覚なのだろうか。

機嫌を取らなきゃいけないから、あんな口調になるのだろうけれど、最近はオカマじゃないのかとも疑っている。

安いから使ってしまうのだけれど、打ち合わせのたびに嫌な気分になるのだった。

「もうこれ以上は、引けないですよ。会社にかえれなくなっちゃいますよ」

「ああ、わかった、そこまで負けてくれたら有難いよ。それで見積もり作って」

「はあい、じゃあ明日もって来ますねえ」

ああ、イライラする。もっと男らしくハッキリ喋れないものなのだろうか、と。

そんな時、僕は良いいたづらを思い付いた。

うちの会社は女性事務社員が少なく、効率をあげるために来客へのお茶は自分で出すことになっていた。

確か、誰かがテレビで見て遊びで買ったせんぷり茶が残っていて、ご自由にどうぞと置いてあったはずだ。

俺はそれを少量、普通のお茶に混ぜて出して見た。

しかしオカマの印刷屋は、最初の一口は多少苦そうな顔をするのだけれど、結局全て嬉しそうに飲み干してしまった。

俺はその笑顔がまた気持ち悪くて、やつがくるたびに少しづつせんぷり茶の割合を増やしていった。

そんなある日、同僚との飲み会でやつの話がでた時に、あり得ない事を聞いた。

「おまえ、あのオカマの印刷屋をそっちの意味で気にいつてるんだって？」と。

どうやらやつに接待を受けた時に聞いたらしい。

ふざけた噂をたててくれたものだ。

俺はもう二度とやつに頼まない。

なぜ印刷会社を変えたのだと上司に聞かれたら、事情をはっきり話してやる覚悟もあった。

他部署の仕事できていた印刷屋を捕まえる。

「あんた、何か変な噂を流してくれたみたいじゃないか。俺はそんな趣味はない」

かなりの必死の形相で食ってかかっていたはずなのに、やつはケロツとしている。

「だって、お客さん、私のお茶に違うものを混ぜていたでしょう？」

「ああ、だからどうしたんだよ」

そうだ、お前は黙って飲んで、仕事をもらっていれば良かったんだ。

「あれがお客さんから私へのメッセージだったんじゃないんですか？私のが好きだっていう」

好き？　なんでそうなるんだ。こいつの思考はどうなってやがんだ。

「せんぶり茶を混ぜて出していたのが、何で好きって解釈になるんだ」

俺が言つと、やつは一瞬驚いてから、少し悲しそうな顔をした。

それを見てさすがに反省する。

子供じみた嫌がらせをしてしまったと。

嫌ってることをはっきり言わなくてもわからせるようにとやった、

悪質ないたづらだったのだから。

しかし悲しそうな顔をして頂垂れるやつの口からでた言葉に俺は悲鳴をあげそうになった。

「ああ、せんぶり茶だったんですか。

私はてっきりあなたの尿だと思って、嬉しくて飲んでたんですけどね。

あなたの愛だと思って……」

ああ、そういやこいつに接待された同僚が連れてかれたのが、スカ 口系のヘルスだったって言ってたな、そう思いだして俺はその場から逃げ出した。

いたづら? 『せんぶり茶』 (後書き)

女性でいう所の、イジリー岡田に使ったスプーン舐められるのと同じ感覚?

断崖絶壁、下は川

見覚えのある靴だった。

先が尖ったビジネスシューズ。

褪せた茶色も記憶の中に。

「珍しい靴だね」

私は聞いた。

「そうだね、前に一度履いたきりだね」

あなたは答える。

その愛しい声に見上げて、見えるのは私の左手を踏んだ靴だけ。

ああ、この痛みも覚えてる。

ショックや絶望感よりも、私は記憶の糸を辿るのに必死だった。

でももうそれも限界だった。

もうすぐ私は力尽く。

いや、それよりもあなたの靴が私の左手を蹴るのが先だったか。

断崖絶壁、下は川。

落ちて助かるわけではない。

でもこの微かな記憶が正しいのならば、何故ここに私はいるのだろっ。

水色の車

屋上から見た景色は、いつもとは違っていた。

たくさんの車が通る大通り。

私は水色の車を探していた。

彼の乗る車の色。

私のもっとも好きな色。

同じような車が通るたびに、私の心はざわつく。

私を轢いて。

そう願う。

一生背負って、後悔するがよい。

私が負った心の傷と、同じくらい傷ついて、悩むがよい。

窓から見ていた時に何度目があったことが。

毎日、大通りを走るあなたを私は見ていたのに。

こともあるうちに、助手席に他の女を乗せて横切るなんて。

遠くの信号に水色の車が止まっているのが見える。

紛れもない、彼の車の色だった。

屋上の柵を乗り越えていた、足がすくんでいる。

それでも手でめいっばい身体を押し出して、距離を測る。

あの車に弾かれない。

後ろのドアが開き、白衣の看護師が現れた。

屋上に吹き抜ける風で何を言っているかは、わからない。

けれど、かき消された声の中に「いまだ、いけ」と聞こえた気がした。

信号が青に変わる。

目標を定め、覚悟を決める。

次の瞬間、私の身体は宙に舞う。

頭から落ちて行き、病室の中の人と目が合う。

私が見たいのは、お前じゃない。

無理やり身体を反転させると、しっかりと車を見定めた。

助手席にはやはり、女の姿があった。

次の瞬間、世界が暗闇に閉ざされた。

「うわああああ、どうしたら!!!!!!!!!!」

車を降りて私を見ながら、叫ぶ彼の声に目を開ける。

それは初めて聞いた彼の声だった。

壊れかけた聴音を通して、胸に深く沈み込んでゆく。

この声に、名前を呼ばれたい。

私はそう願った。

死にたくない。

私はそう思った。

かすむ視界の中、私は彼を見つけ、全身の力を振り絞り立ち上がる。

「きょ……う……っ……」

声が出ない。

それでも必死だった。

「し……にたく……ない」

青ざめた彼が固まり、膝を床につける。

車を降りて、駆け寄る人々に先を越されまいと、彼にしがみつく。

震える彼の耳元で、呼んでほしいと願う自分の名前を伝えようと
して、口を開いた瞬間、大量の血が彼の顔にかかる。

「ひあああああ……!!」

叫ぶ彼の耳元で、私はずっと自分の名前を刻み込ませた。

変わらないもの

「こんな最低男と、やっていたなんて考えると吐き気がするわ」

それが彼女の最後の言葉だった。

無職の居候の身で、別れることになっても、すぐにではいけなかった。

だから毎日、彼女に何を言われても、僕は我慢していた。

この寒い中、廊下で寝ることを強制されても。

風邪をひいて咳をしていた時に、うるさいからと外に出されても。

でもこの言葉だけは、我慢ならなかったのだ。

次の瞬間、僕の手は彼女の首を絞めていた。

殺そうとか、考えていたわけではない。

ただこれ以上、傷つけられる言葉が口からでてくるのが怖かったのだ。

両手の力を振り絞って彼女の首を絞めたとき、凄い力で僕の腕に爪を立てた。

でもそれは、夜の行為のときに、彼女が僕の背中に爪を立てるときを連想させた。

もう一ヶ月以上、同じベットで寝かせてもらっていない。

彼女に最後に背中に爪をたててたのは、一体いつのことだったか。

気が弱くおとなしく、いつも言いなりだった僕が、唯一彼女の優位にたてるのはベットの床中だけだった。

身体中から力が抜けて、僕に身を預ける彼女を僕はいとおしく感じた。

完全に彼女が動かなくなるまで、必要以上に首をしめてから、僕はゆっくりと手を離す。

でもそれでも怖かった。

彼女がもし息を吹き返したら、今度は何を言われるのだろう。

僕は廊下にたてかけてあったギターケースを持ってくると、ぐったりした彼女の顔面を下から、たたきあげた。

愛しいものを見る優しい目が、さげすみの目に変わってしまったことを嘆きながら。

厳しいことを言ってもどこかに愛情のあることを言っていた口が、人格を否定することしか言わなくなってしまったことを嘆きながら。

全て何もかもなくなるまで。

その日の夜、一ヶ月ぶりに入ったベッドの中は、彼女の匂いでいっぱいだった。

唯一変わらない、その匂いに包まれて、僕はほんの少しだけ泣いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2190n/>

ショートショート他

2011年10月6日17時11分発行